

森鷗外「舞姫」草稿における推敲の意味（承前）

嘉 部 嘉 隆

前稿においては、「舞姫」草稿中の特に目立った大幅な推稿部分を取り上げ、その推敲の意図するところと、その効果を考えてみた。本稿においては、比較的小さな推敲部分について、箇々にあるいは共通する要素を持つものを集めて、いろいろな角度から検討を加えてみたい。それとともに、のちになって諸本に収録される時点で改稿されながら、草稿においては手を加えられなかった部分の意味についても、合わせて考えてみたいと思う。なお、「舞姫」の本文を引用するに際して使用した記号は、前稿と同じである。「　」内が案文、《　》内が行間への書き入れ、()内は削除された部分を示す。傍線部分が完成稿である。○印でかこんだ数字は、その文が入っている分節番号を示している。○印でかこんだ数字の下部にabcなどアルファベットがついているのは、同じ用例が同一分節内に二箇所以上ある場合で、その用例の使用された順番を示している。なお、

分節番号については、前稿の注記を参照されたい。「舞姫」本文中の固有名詞に施されている傍線は、引用に際しては省略した。まず、前稿において取上げなかった、しかし多少書きかえた意味のある部分をいくつか抜き出して論じてみよう。一応、作品の順を追って取り上げることにする。

④ 嗚呼、奈にしてかこの「憂ひ」恨みを「拂はん」銷せん若し「昔し」(《他》)外の「我」(《憂》)恨みな「ら」りせば詩に詠じ歌によみたる後は心地すがしくもなりなん、こ「の憂ひ」れのみは餘りに深く我心に「彫」鏝りつけられたればさはあらじと思へど

つまり案文は「この憂ひを拂はん若し昔しの我ならば」とあったのである。それが結果的に「この恨みを銷せん若し外の恨みなりせば」とかえられている。「憂ひ」が「恨み」にかえられた意義につ

いては前稿に論じているので、ここでは省略するとして、「若し昔しの我ならば」が「若し外の恨みなりせば」にかえられた点について注目してみたい。「昔しの我ならば」であれば、第三節の「今の我は西に航せし昔の我ならず（中略）われとわが心さへ變り易きをも悟り得たり」という文章とも照応する。ところが、逆に案文では自己が變つたことは言い得ていても、自らが生じさせた事件の深刻さは理解できていないことになる。三節ですでに自己の内面の變革を自覚している主人公にとって、この「恨み」の深刻さを表現するために「外の恨み」と比較させなければならなかったのだと言えよう。

⑥ 遠く望めばブランデンブルゲル門を隔て、緑樹枝を（交えたる）《さし交は》したる中より（屹然として）半天〔を〕に浮び出でたる戦勝塔の神女の（金）像——

ここでは「屹然として」と「金」ということばが案文より削除されている。「屹然として」が削除されているのは当然のことであろう。というのは、「遠く望めばブランデンブルゲル門を隔て、」ウンテル・デン・リンデンから神女の像を見ていることになる。神女の像はせいぜい六七メートル、神女の像からブランデンブルク門まで五六メートルはある。近くで見れば神女の像も「屹然として」見えるであろうが、「遠く望」んだのでは「屹然として」見える筈はない。作者鷗外がかつて近くで見た印象をそのまま記し、あとで気づいて削除したと考えるとよいであろう。「金像」の「金」が除かれたのは、「金像」では安っぽ過ぎるという感じもあるだろうし、「緑

樹」との調和がとれないということもあるであろう。また「遠く望」んだ神女の像の色が、いかに金色であってもそれほど目立つとも思えない。これらの理由から「金」という字が除かれたと思われる。それにしてもまだ「半天に浮び出でたる」は不自然である。他にくらべるもののないやや高い建造物であったとしても、わずか六十メートルあまりの神女の像を遠くから見て「半天に浮び出でたる」という表現は、主人公の実感ではなく作者鷗外の近くで見た際の印象が描かれていると言うべきであろう。（もつとも「半天」の解釈にもよるが）

⑩ 奥深く潛みし《眞の》「我」は次第々々に表てに顯れて（或るとき突然と）昨日までの我ならぬ我を攻撃〔し〕するに似たり

この場合の「昨日」は「前日」の意味ではあるまい。やや近い以前を意味するものと思われる。とすれば、「次第々々に表てに顯れて来た「眞の我」が「或るとき突然と」「攻撃したり」では辻褃があわない。「次第々々」にあらわれたから「攻撃するに似たり」という感じを持つことになるのである。急な変化ではなく徐々たる変化なのである。もつとも、三年ばかりの「自由なる大学の風」に当たっている期間からくらべれば急激な変化とも言えるのであろうが。

⑫ 父は死にたり——〔昨〕明日は葬らでは協はぬに家に一錢の貯へ《だに》なし

「昨日」と「明日」とでは一字違ひながら大きく異なる。「明日」ならば、事情は切迫しているとはいへ、まだ時間的に多少の余裕はある。エリスが「寺門の扉にて倚り」泣いていても救われる余地は残っている。しかし「昨日」であればシャウムベルヒの要求を受け入れざるを得なかった筈である。

②④ (石の梯を登(りて見(る)こと三たび、とみ(れ)ば(腰を折(りて)潜(らば頭や支えんと思ふ計りの)「(《りつる》)るべき程の戸あり

この部分は前稿にでも取り上げている。その一部であるが前稿にては、この部分についての推敲の意味や効果については触れなかった。「登りて見ること三たび、とみれば」が「上りて四階目に」と簡潔になっていることはともかく、「潜らば頭や支えんと思ふ計りの」が「腰を折りて潜るべき程の」と改められていることは問題である。「潜らば頭や支えんと思ふ計りの戸」であれば、ちよつと膝をかかめれば入れるほどの高さで、戸の上辺は目の高さのあたりになろう。ところが「腰を折りて潜るべき程の戸」ということになると、戸の高さが相当低い位置にあるという感じになる。戸の上辺が目の高さであれば、他の条件を別とすれば、戸の外の豊太郎から、戸の内にいるエリスの母の顔が見えてもおかしくはない。しかし「腰を折りて潜るべき程の戸」であれば、エリスの母かあるいは豊太郎か、または双方がよほど腰をかかめなければ、豊太郎からエリスの母の顔が見える筈がないことになる。従つて、この文章のすぐ後に来る、

「半ば白みたる髪、悪しき相にはあらねど貧苦の〔状〕痕を額に印せし面の老嫗」という描写は、一人称小説としては不自然ということになるのである。また、戸のすぐ外にエリスが立っているとすれば、エリス自体が邪魔になつて、益々戸の内は見にくいということになる。豊太郎の立っていた位置も問題になるが、この点については書かれていない。エリスの母が豊太郎のいることを認めたかどうかということさえわからない。第二五節に「さきの老嫗は懇懃におのが無禮の振舞せしを詫びて」とあるが、これは豊太郎が居たのを認めながら無視して振舞つたことを詫びたととれないこともないが、必ずしもそうとも言ひ切れない。エリス一人を認めて荒々しく振舞つたことが、結果的には豊太郎に対する失礼な行動になつたということに詫びたとも考えられるからである。とにかく「腰を折りて潜るべき程の戸」は、屋根裏の窮屈さを表現しようとしてのことではあつたのだから、かえつて一人称小説の視点からは破綻を招いてしまつたと言ふべきであらう。

②⑤ この時を始めとして「わが」余と少女との交際は漸く「深く」繁くなりもて行きて同郷人に《さへ》知られ(中略)われ等二人の間には《まだ》「純尚ほ」癡騷なる歓樂のみ存じたるを「深く」が「繁く」にかえられたのは、前後の関係から見れば当然であらう。「まだ癡騷なる歓樂」が「深く」い交際では矛盾する。また三二節の「余所目に見るより〔は冷淡〕清白な(るものな)りき」とも矛盾することになるからである。

③① 「クルズス」果て、後「ヴィクトリヤ」座に出で、今「も猶

ほかの座にて」は場中第二の地位を占めたり

この場合、「今も猶ほ」と表現するならば、これ以前にどこかでエリスがヴィクトリヤ座で第二の地位を占めていたことが記されていないならばならないし、また、その地位が変動しても当然な出来事があったということになる。しかし、ヴィクトリヤ座におけるエリスの立場については、第二六節に「彼が抱えとなりしより早や二年なれば」とあるだけであり、二年で「場中第二の地位を占め」ることは、むしろ早いくらいであろう。従って「今も猶ほ」より「今は」の方が適切である。

③② 余が彼を愛〔す〕づる心の〔漸く深〕俄に強くなりて遂に離れ難き中となりしはこの〔時のこと〕折なりけり

「愛す」の「す」が消され、すぐ下に「づ」と書き直されているところからも、鴨外が明らかに「愛する」と「愛づる」を使い分けていることが判断できる。「舞姫」における、豊太郎の「愛」をめぐっての論を考へる場合、この草稿における書き直しは重要な意味を持つとも言える。「漸く深くなりて」が「俄に強くなりて」と書きあらためられたのは、「二三」一週日の猶豫」という第三〇節の文言から判断すると至極当然なことで、豊太郎の身辺に急変が起り、豊太郎の理性が失われたればその出来事であったのだから、「漸く深く」は不適当だということになる。

④② 襟飾りさへ《余が為めに》手づから結び（て遣り）ぬ

この部分も、前稿で論じたところだが、エリスを中心に叙述された点を一人称小説の視点に書き直している。「襟飾りへさ手づから結びて遣りぬ」では、第三者が述べていることになってしまう。そこで「遣りぬ」ということばを除き、また豊太郎が自分で結んだことにならないように、「余が為めに」ということばを補ったのである。

④④ エリスが母が呼〔で來〕びし一等「ドロシユケ」は輪下にきしる雪〔路〕道を窓の下まで來ぬ余は手袋をはめ《少し汗れたる外套を脊に被ひ〔た〕てて手をは通さず》帽を取りて

「エリスが母を呼〔で來〕びし一等『ドロシユケ』にエリス母子の期待と配慮が見られるわけだが、それと対照的に「一等」ドロシユケにふさわしくない「少し汗れたる外套」という、現在の豊太郎の生活状況を示している句が、手袋と帽子の間に加えられた。一人称小説として「少し汗れた」と表現されていることは、主人公がその「汗れ」を気にしていることになろう。手袋が出て来たために、あとで気がついて外套を加えたのであろうが、四五節の「外套をはここに脱ぎ」という加筆と相応じて効果を發揮していると言えよう。

④⑤ 余が大臣の一行に随てペーテルスブルクに在りし間〔は〕〔余を圍繞せしは〕巴里絶頂の《侈奢》を氷雪の裡に移したる〔宮〕王城の粧飾、故らに黄蠟の燭を幾つともなく點した

るに〔幾百〕幾星の勳章、幾枝の「エボレット」が映射する光り、彫鏤の工みを盡せし「カミン」の（火中に燃ゆる）火に寒さを忘れて使ふ宮女《が》（手中の）扇の閃めきなど（目に駭し心を動かしぬ——）にてこの間、仏蘭西語を（圓滑）最も圓滑に使ふものは余なるがゆゑに〔主賓〕賓主の間に周旋して事を弁するものもまた多くは余なりき

「扇の閃めきなどに目を駭かし心を動かしぬ」と結んだのでは、「余が（略）に在りし間は」であっても「余が（略）に在りし間に余を圍繞せしは」であっても主述関係が成り立たない。そこで「なり」の連用形「に」に接続助詞「て」がついた「にて」で受けることにより、主述 関係を明瞭にし、以下に続けたと見てよからう。「主賓」を「賓主」にかえたのは「主賓」であれば「主な賓客」という意味もあり、誤解を防ぐためと考えられる。「在りし間は」が「在りし間に余を圍繞せしは」と加筆されたのは、あとの叙述に対し、より厳密に主人公の立場を説明したのであらう。

⑤ この間、余はエリスを忘れざりき、否、彼は日毎に書を寄せ
〔ぬ〕しかば《え》忘れ〔得〕ざりき

「書を寄せぬ」だけでは、現象の説明だけであって、エリスを忘れることのできない理由の説明にはならない。「寄せしかば」という順接確定条件を示す、原因・理由の説明になる接続助詞「ば」を使用し、さらにもう一度「え忘れざりき」とつけ加えることによつてエリスを忘れなかつた理由が強調されることになる。

⑥ 耻かしきはわが鈍き心なり（中略）果断ありと自ら心に誇りしが此果断は順境にのみありて逆境にはあらず（一たび）我
〔身の進退の人の幸福に関〕と人との関係を照さんとする
〔を見て〕ときは頼みし胸中の鏡は曇り〔にけ〕たり

「一たび我身の進退の人の幸福に関するを見ては」以下文末までは一氣に書かれ、そのあとで「一たび」を消し、さらに「身の進退の人の幸福に関」を一本の縦線で消して右側に「と人との関係を照さんと」と書きかえている。「我身の進退の人の幸福に関する」とは五六節に展開された、エリスからの手紙の内容を受けて具体的である。しかし、ここでは具体的に過ぎるとかえつて効果が減殺される。主人公自身の決断力が順境の際にのみ発揮され、逆境の際には全く働かなくなるという、いわば一般的な性格であることを強調している文章である。それゆゑ、五六節の内容を抽象化してしまう必要があつたわけである。そこで「我と人との関係」というようないづれの場合にでもあてはまるような表現にかえられたのであらう。「我身の進退の人の幸福に関する」なら「を見」と受けて「胸中の鏡」という比喩につないでも不自然ではない。しかし「我と人との関係を見ては」ではつながらない。そこで「を見て」を「とき」にかえ、「鏡」に照応するように「照さんと」ということはを補つたものであらう。

⑦ 或る〔とき〕日の〔午後〕夕暮、使して招かれぬ（大臣）

《往きて見れ》ば待遇殊に〔厚く〕めでたく〔深く〕魯西亜
 行の〔恩を〕勞を問ひ慰め（玉ひ）て後〔宣ふやう〔卿〕君
 が滞留も余りに久し〕われと共に東に帰る心はなき〔や〕が
 「午後」が「夕暮」にかえられたのは、ホテルを出てから帰宅する
 までの豊太郎を描くためであろう。まだ明るいうちにベンチに倚つ
 て失神し、外套の肩や帽の庇に雪が積っていたのでは、道行く人に
 気づかれて、一寸許りも積もるまで放置されることなく起こされる
 か、何らかの形で処置されるかで、深夜辛うじて帰宅しそのまま人
 事不省に陥るといふ筋書きにはならなくなる。そこで、ホテルを出
 た時には既に暗くなっている「夕暮」でなければならなかったのだ
 ある。「深く」が削られたのは、直前に「めでたく」があり、形容
 詞が二語並び「く」が続く上に、「深く」が上の語を受けているの
 か、下の語にかかっているか、やや不明瞭になることを嫌ったため
 であろう。「宣ふやう〔卿〕君が滞留も余りに久し」が削除された
 のは、直後の天方伯のことばの中に同様の内容が出て来るため、
 この部分は後に持つて行ったと推測できる。

⑩ 「いかにかし玉ひし、おん身の姿は」（此時の彼が顔は今も
 見る如くなり）

この削除部分は、字の大きさから判断すると、あとから書き込み、
 考え直してまた削除されたように思われる。何故あとから書き込
 み、また消してしまったのか、前後の関係から推量することはむづ
 かしい。七三節以降に描かれるエリスの変わり果てた様子を強調する

ためには、この場面でのエリスの印象が強すぎては不都合なのであ
 ろうか。

以上前稿では取り上げなかった、比較的短かい文章や語句の推敲
 過程を粗上にのせてみた。これからは、もっと短かい語句や言葉の
 推敲について検討してみることにする。○で囲んだ算用数字は分節
 番号、その直後に案文を示し、↓で改訂された定稿を示す。（名詞
 の変更については、前稿および本稿ですでに取り上げている文
 中にある場合、再度変更例として取り上げることがせず、原則とし
 て省略した。）なお、案文において傍線を施してある場合、傍線の
 部分のみが↓の下に示した字句にかえられていることを意味してい
 る。

名詞の変更

- ② a 幾百言↓干 ② b 帰途↓途 ④ a 生面の人↓客 ④ b 古址↓
 蹟 ④ c 慙恨↓恨み↓惨痛 ④ d 電索↓氣線 ⑤ ととき↓日 ⑥ a
 検索↓束 ⑥ b 男女↓士 ⑥ c 外觀↓美 ⑩ 我性質↓身 ⑬ a 木
 ↓木の葉 ⑬ b 父兄↓長者 ⑬ c 巷路↓巷 ⑬ d 家↓人家 ⑬ e
 凸凹ある石梯↓梯 ⑬ f 貸屋↓家 ⑮ a 屍↓なき人 ⑮ b 隅の方
 ↓屋根裏 ⑮ c 歌芝居↓芝居 ⑮ d 現世↓當 ⑮ e 凌へ↓温習 ⑮
 f 親兄弟↓腹から ⑮ g 某社↓社 ⑮ h 家↓棲家 ⑮ i 天窓↓引 ⑮ j 筆
 力↓力 ⑮ k 一種の個↓一家の個↓一隻 ⑮ l 表面↓表て ⑮ m 今↓昨
 夜 ⑮ n a 一場↓段 ⑮ n b 歴史↓事 ⑮ n c 君↓當時 ⑮ n d 己れ↓朋友
 ⑮ n e 余が↓わが ⑮ n f 寒風↓風 ⑮ n g 問↓答 ⑮ n h 酬ひ↓代 ⑮ n i ゴタの↓

魯延の ⑤④書↓ふみ ⑤⑥情↓思ひ ⑤⑧朋友の間↓友 ⑥②情↓念
 ⑥⑤寺院↓寺 ⑥⑦額↓頭 ⑦④a 彼↓相澤 ⑦④b 一諾↓約束 ⑦④c 頭
 の髪↓髪

これらの変更の中には単なる書き誤りを訂正した例もある。(例え
 ば⑤①)しかし、大部分は何等かの理由があつて改訂しているよう
 である。⑥⑦などは、「灼くが如く熱し椎にて打たる」が如く響く」に
 続くのだが、⑥⑦の直後は「を榻背に持たせ」となっている。とすれ
 ば、「額」をベンチの背にもたせかけたのではどのような恰好にな
 るかを考えれば、「頭」でなければならぬことは容易にわかるこ
 とである。このように変更理由の比較的わかり易いものもあれば、
 作者の主観としか言いようのない変更もあるわけである。いづれに
 しろ、より正確に、より効果的に、より簡潔に表現しようとしてい
 る意図は読み取ることができる。

次に表記の変更(特に漢字からかなへ)が九例ほど見られる。

①①答へ↓いらへ ①⑧黄金↓こがね ①⑨一人身↓ひとり身 ①④燈ま
 りぬ↓せまりぬ ①⑤成し果てつ↓なし果てつ ①⑤⑥諾なふ↓うべな
 ふ ①④書↓ふみ ①⑤③云ひし↓いひし ①⑥伯林↓ベルリン

このうち、①④は名詞の変更の例としても挙げたように、ことばの変
 更とも考えられる。①①も同様である。①⑤は、直後に「さて諾べなひ
 し上にて」という文が来ることを考え合わせると、同じ漢字が近く
 にくることを避けたと解釈できる。

以上のほか、主な改訂の例としては、①熾熱燈の↓熾熱燈の光の
 ②帰途に↓こたひは途に ①⑩頗る乱れて↓乱れて ④a 慰めあふ

が習ひ↓慰めあふが航海の習ひ ④b この憂ひ↓この ④c 鍵を
 鎖する↓振る ⑥a 一段高き人道↓両邊の石を鋪ける人道 ⑥b
 杖を交えたる↓さし交したる ⑦⑦獨逸語↓獨逸、佛蘭西の語 ①①
 a 嗚呼、我母は↓余は私かに思ふやう、我母は ①①b 余をして↓
 余を ①①c なさんとし↓思ひ↓し ①⑦凹字の形に横に引籠みて立
 てる↓凹字の形に引籠みて立てる ①⑧a 半ば長き睫毛に↓半ば
 露を宿せる長き睫毛に ①⑧b 何故に用心深き↓何故に一顧したる
 のみにて用心深き ①⑨力を藉り易き↓借 ②⑦われは知る↓見ゆ
 ②④答ふる間も戸を↓答ふる間もなく戸を ②⑤歿せし↓すぎぬ ②⑥
 a 乳の如く白き↓乳の如き色の ②⑥b 我をば憎み玉はじ↓我をば
 よも憎み玉はじ ②⑥c 金をば給金を↓金をば薄き給金を ②⑨わが
 ↓余と ③①a 余に謂ふやう↓謂ひしは ③①b 二三日↓一週日 ③①
 c 悲痛を極めたる↓覺えさせ ③①b 反復すること能はずに忍びず、
 こは否、忍び堪涙の↓反復するに堪へず、涙の ③①a 余所目に見
 るよりは冷淡なるものなりき↓清白なりき ③①b 衣裳をも着くれ
 ↓纏へ ③①c 讀むこと↓物讀むこと ③②余に請ひて↓向 ③④身に
 負ひたる↓負ひたる ③⑦a 光を取り↓光を取れる室にて ③⑦b 世
 を遊び暮らす↓遊び暮らす ③⑧退きたり↓荒みぬ ③⑨留學生などの
 夢にも↓留學生などの大かたは夢にも ④①a 死にたるが見ゆも↓
 死にたるも ④①b これより↓それより ④①a 疾く来玉へよ↓疾く
 来よ ④①b われを見んといふなり↓呼ぶ ④③時ありとも↓日はあ
 りとも ④④彼は余が乗りし車を↓余が乗りし車を ④⑤午餐を共に
 してせんといひぬ↓余と午餐を共にせんといひぬ ④⑦a 君が↓唯

だ ④7 b君の官職を擧かれし理由↓當時の免官の理由 ④7敢て
↓強て a ④8満足を興ふことも確かならず↓満足を興へんも定
かならず ④8 b可憐のエリス↓エリス ④8 c失はじと思ふが常に
て↓思ひて ④8 d抗抵することを得れども↓抗抵すれども ④8 膚
慄ふ↓膚へ粟立つ ④9 漸く繁く↓これより漸く繁く ④9 持て帰り
てエリスに↓持て帰りにて翻譯の代をばエリスに ④9 預けて置て↓
預けて ④9 a余が↓わが ④9 a或る時の↓或る日の↓程程での ④9
b否々といふ二字↓否といふ字 ④9 c常に思ひしことには君は↓
君は ④9 d別れし↓立出で玉ひし ④9 e今は心折れぬ↓心折
れぬ ④9 fステツチンに近き↓あたりの ④9 g我願ひ↓我路用の
金 ④9 嗚呼今更おもへば↓今更おもへば ④9 a足を縛して↓足に
糸を付けて ④9 b我官長↓我某省の官長 ④9 a除夜を眠らぬが
習ひ↓除夜を眠らず元旦に眠るが習ひ ④9 b寒さはまた強く↓寒
さは強く ④9 帰りに来すば↓帰りに来ませずは ④9 a喜びの涙は↓彼
が喜びの涙は ④9 bはらはらと落ちぬ↓はらはらと肩の上に落ち
ぬ ④9 4同き↓白き ④9 a此時↓暫くして ④9 b骨に徹すと見て↓
覚えて ④9 歩きうる↓歩みうる ④9 椅子の處まで行かん↓を握ま
ん ④9 a看護↓みとる ④9 b余は病牀に↓余は始めて病牀に ④9
a身につけて離さず幾度か↓身につけて幾度か ④9 b抱けり↓あ
り ④9 生動する↓生ける

などの用語の変更、加筆、削除などが見られる。(助詞、助動詞に
関する変更は別に挙げるので、概ね除いた。しかし、一部重複して
いる場合がある。) これらの変更も、ひとつひとつにそれぞれ変更

の理由が考えられるものが多い。しかし、いちいち書き記してい
たのでは繁雑になるので、事実の指摘にとどめたい。

次に、助詞・助動詞を主とする改訂を抜き出してみると、

②もてはやされたれど↓しか ○ a 乱れたれば↓て ① b 多くて
↓きに↓くて ④外の恨みならば↓りせ ⑤ a 故郷なる母をも↓
母を ⑤ b 受けたり↓ぬ ⑤ c 諭えて漸く老いんとする母↓諭え
し母 ⑥ 思はれん↓思はん ⑦ 教へもせん↓し ⑩ 好尚なり↓な
るらん ⑪ a なさんとしたり↓とや思ひけん↓とやしけん ⑪ b
廣言したり↓ぬ ⑪ c 足らざりしならん↓けん ⑬ 我身だに↓さ
へ ⑭ a 生れながらに↓にや ⑭ b ありしやらん↓けん ⑭ c
育てられしに↓しによりて ⑭ d よるらん↓生じけん ⑯ 媒とは
なりける↓媒なりける ⑰ a 打ちたり↓ぬ ⑰ b 貯へなし↓貯へ
だになし ⑰ a 頼へたる↓頼ふ ⑰ b 注がれたり↓ぎ ⑰ 飛びの
きたり↓ぬ↓つ ⑰ a 寵なり↓あり ⑰ b 支えぬべき↓支ゆ
彼をば↓彼を ⑰ 取らせん↓す ⑰ 濃ぎたり↓ぬ ⑰ a 來たる↓
し ⑰ b 咲かせたり↓てけり ⑰ c 同郷人↓同郷人にさへ ⑰
我職を解き↓いてけり↓きにき ⑰ a 衣食にも↓衣食も ⑰ b 剛
氣なる↓ある ⑰ c 依りにき↓てなり ⑰ 關りしをば↓關りしを
⑰ a 遂には↓遂に ⑰ b 憐れみて↓憐れみ ⑰ a 浮ぶ瀬はなから
む↓あらじ ⑰ b 手だてもなし↓手だてなし ⑰ 今は↓今ま ⑰
家を↓棲家をも ⑰ a 退きたり↓荒みぬ ⑰ b うな垂れうな垂
れて ⑰ c 繕きて↓繕き ⑰ d 講筵さへ↓だに ⑰ a 凍えたる↓
し ⑰ b 卒倒したり↓せし ⑰ a 消印は↓消印には ⑰ b 伯林な

り→とあり ④c 拆き見て→拆きて ④a かく改まりたる↓形を改め玉ひし↓形を改め玉ふ ④b ごとくにはあらず↓な ④a 余は↓が ④b 出でたる時↓し ④a 答ふ↓答へぬ ④a 薦むるには↓薦むるは ④b 戀にはあらず↓戀にあらず ④a 望むが如きは↓望む如きは ④b 與ふること↓與へんも ④a 摸ちて↓ぬ ④a など擧げて↓などを擧げて ④a 問ひぬ↓問ふ ④a 除きぬ↓し ④b 事→には ④a 宮女手中の扇↓宮女が扇 ④a 残りしことの↓を ④b 思ひを↓思ひをは ④a 知れる↓りぬる ④b 族もあらず↓なし ④a 曇りにけり↓たり ④a 見たり↓き ④b 大臣も↓の ④c 告げにやしけん↓告げやしけん ④a 彼は↓が ④a 善くこそぞ ④b 帰り來すば↓帰り來ませずは ④a 憶ふ情榮達を↓憶ふ念と榮達を ④b 時としては↓時として ④c 散れて↓り ④a 心には↓にて ④a 大臣も↓大臣をも ④b 心はなきや↓か ④c 偽りなりとは↓も ④d 手に↓手にしも ④e 本國を↓本國をも ④f 起りぬ↓れり ④a 打つが如くに↓打たるゝが如く ④b 肩は↓肩には ④a 來たる↓し ④b 道にて↓をば ④c 庖厨を過ぎて↓過ぎ ④a 失ひつ↓失ひたれば↓失ひ ④a 答へんとしたれど↓す ④a 膳ひ置きしといふ↓なり ④b 驚きたり↓ぬ ④a 敬歎するのみ↓敬歎す ④b 感觸をも↓感觸も ④c 抱けり↓あり ④a 生動する↓生ける ④b 一點彼を↓一點の彼を

というように、かなりの手入れのあとが見られる。文末において、「たり」を「ぬ」にかえている箇所が五例あり、文末は「ぬ」が目立って多い。そして、これが「舞姫」の本来の文体ではないかと考

えられるのである。阿達義雄氏は、「森鷗外『舞姫』の改訂とその意義」(『新潟大学教育学部紀要』(三)昭38・3)の中で、『美奈和集』における改訂において、「ぬ」を「つ」に変更した例が多いことを指摘し、「明治の文語体小説に於て、氣息奄々たる完了の『つ』は、鷗外の特異な心境と、その優れた文学的才能とを俟って、今や再び『舞姫』の中に深刺とした生命を与えられたのであった。」と結論を下しているが、果して助動詞「つ」の役割がそれほど重要なものであったのだろうか。檀原みずすが指摘しているように、『美奈和集』における改訂においては、『言海』の「語法指南」の影響によって「ぬ」が「つ」にかえられたところが多い。ということは、『美奈和集』以後の文体は、鷗外が本来身につけていた文体とは異なるということになる。文学研究においては、どうしても主観的にならざるを得ないこともあり、主観的な発言を否定するわけではないが、阿達氏の論は、感じと推測が多く、文体の問題に関して説得力が弱いのではないだろうか。むろん、文体について発言する場合、語彙のみならず多くの要素がからんでくるので軽々しい意見はさし控えたいが、「ぬ」と「つ」に関する限りでは、筆者は「つ」が多くなったために「舞姫」がよくなったとも思えない。

草稿執筆に際して、鷗外に表記にかかわる何らかの規範意識があったのかどうか、草稿を検討していて気にかかる点である。たとえば送りについて言えは、「頭べ」と第四節に出て来るが、あとは「頭」だけであって「べ」という送りがなはない。「縦令ひ」は

「ひ」を送っている場合が多いが、送っていない一例も見られる。ところが「また」などは、二八箇所中「又た」が二四箇所、「亦た」が一箇所、かな書きが三箇所、ある程度意識して統一されているようである。同じことは「ただ」についても言える。「唯だ」が九箇所、「唯た」と濁点の脱落が一箇所、かな表記が一箇所である。「なほ」も八箇所が「猶ほ」であり、一箇所が「尚ほ」であるが、「また」「ただ」「なほ」のいずれもが、漢字を使用した際の送りがないという視点からは、はっきりと統一されているのである。

意志の助動詞「む」についても、「ん」に統一されており、案文に「む」と表記されているところがあるが、結局抹消されているので表面に出していない。

「我」も送りがなの問題を考える場合、注意すべき字だと言えるであろう。「我」「我が」「わが」と三種類に表記されており、しかも「我」の場合は「わが」と読むほか、「われ」とも読まなければならない場合も多いのである。この字の読み方については、前後の関係から判断しなければならず、ほとんど無原則というしかないようである。

固有名詞で気になるのが「ベルリン」である。カタカナ書きの場合には二重傍線が施しており、「伯林」と表記してある場合は傍線はない。第六〇節などでは、まず「伯林」と書き、これを消して「ベルリン」と書き直している。外国の固有名詞について、どのような意識で表記していたのだろうか。人名にしても「維廉」「拂得力」である一方、「シヨッペンハウエル」や「シルレル」なのである。

外国語のカタカナ表記には△「カビン」▽△「クルズス」▽△「ゲイロック」▽のように「」が施されているが△咖啡▽△ぼたん▽などという表記もある。カタカナ書きの場合の長音は、草稿では長音記号で統一されている。

草稿に関しても、まだ書くべきことが残っているが、今回は時間に迫られていて、十分に書くことができなかった。(細かい改訂についても、いちいち意味づけることができればよかったと思う)

草稿本文の引用については、すべて原文に即して、略字体のものは略字体で(その略字体は、殆ど新字体の現行の漢字になっている)、本字体は本字体のまま引用した。校正の段階でこれをどれだけ厳密にもとのままに再現できるか、初校しか取る時間がないので、いささか気がかりである。なお、現在でいう、いわゆる変体仮名はすべて現行の字体に直し、合字「ㄣ」も「こと」と改めた。